氏名	崔　壽現
ヨミガナ	チェ　スヒョン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第543号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉　仏教儀式・散華からみたジュエリーの造形研究 〈作品〉　花びら吹く 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	飯野一朗
（論文第１副査）	東京都庭園美術館	事業企画係長・学芸員	（）	関　昭郎
（作品第１副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	前田　宏智
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	桐野　文良
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私は修士課程において癒しを与える造形に興味を持ち、多肉植物をモチーフにジュエリーを制作して来た。フォルムや造形が人々に与える印象や影響、そして人が造形物を視覚的に捉える際に抱く感情を念頭におき、その表現を試みた。例えば、丸みを帯びた形は柔らかく優しい印象を、鋭く角ばった形は、冷たさやかしこまった感情を抱かせる。多肉植物で表現したのは、植物の持つ生命力、そしてその愛らしい姿が鑑賞者に与える安心感や安らぎである。

私が作品を作る上で最も大切にしていることは、他者とのコミュニケーションを図ること、特に作品を通じて私自身が感じている感情や世界観を共有することにある。私がジュエリーに価値をおくのも、ジュエリーは人の心を左右するものであり、ときめきと喜びを与えてくれるからである。ジュエリーは「人の身を飾る」という機能があり、文字通り人と密接な関わりがある。創り出したものを他者に身につけてもらい、「私が感じたものを、それを身に纏った人と共有したい」という想いから、取り組み始めたものだ。ジュエリーは身につけた際に装着する人物の個性や人柄をも表すだけでなく、着ける人の感情を反映する。直接身につける行為は日常生活に元気と楽しみを与えるだけでなく、身につける人の一部になって、否定的な感情から解放させてくれるだろう。

私にとってのジュエリーは富や地位の象徴では無く、マリッジリングのように、個人的な感情や想いを表せる手段だと考えている。

博士過程に於いては、更に他者の感情や感覚に触れる造形や表現を作品に投影することを目標とし、フォルムや造形からのイメージの表現に留まらず、情景や記憶、私たちの心の根底にあるものをテーマとし、私自身の記憶を遡り最も鮮烈に残る情景を探り、形にすることとした。

ある日、恩師である飯野一朗先生が古美術研修旅行の引率から帰られた時、散華を観られた経験を話してくれた。その時、幼少期に見た美しい散華の記憶が走馬灯のように思い出された。代々家の宗教が仏教

で、私が通った幼稚園も寺院に付属していたこともあり、幼い頃から仏教と関わることが多かった。私の母国である韓国では毎年、釈迦誕生の日になると蓮の花の灯りを作り、そこに蝋燭を灯して祈りを捧げる風習がある。その日が近くなると寺から始まった蓮の花の灯りは、列を作って町の中まで灯りで染まって行く。釈迦誕生を祝う日、空から降ってくる花びらが舞う様子の美しさを目の当たりにし、何か大きなものに守られているような安心感や喜びを感じたその瞬間の記憶が心の奥にある。

そして、日本に留学している私にとって、日本での散華はどのように行われているのか興味が湧いて来た。早速、散華の儀式が行われる東大寺と興福寺がある古都奈良へ向かった。そこでの散華儀式で降ってくる花びらは、美しさと荘厳な雰囲気に包まれていた。私は奈良でも母国と同様に、癒されているような感覚や心地よさを儀式から感じた。

韓国人でありながら、現在、日本に留学している私にとって、仏教というものが日本人と韓国人に共通の存在であることを改めて認識した。歴史的に辿ってみると文化の土台となるのは宗教なのである。人間は極めて宗教的な生き物であり、人類の歴史と宗教の歴史は軌を一にするとも言えるだろう。

仏教の儀礼の中で最も重要とされているのが、釈迦誕生を祝う儀式であり、ここでは散華が欠かさず行われている。仏教の経典には仏が誕生する日、「空から雨のように花が降ってきた」という表現がある。すなわち、仏がこの世に来たことを賛嘆したのが散華の始まりである。このように始まった散華は仏教の経典だけでなく、絵画や儀式、建築や工芸など、仏教の造形芸術に至るまで様々な形で表されている。

こうした散華を通じて感じた情景の美しさや心地よさを、長年学んできた彫金技法を用いジュエリーという形で表現したい。そして、この作品が古くからの伝統と現在、未来に繋がるものであって欲しいというのが、博士課程での目指すところである。私は修士課程で人を癒す造形について研究をしてきたが、散華も本来、天と人間をつなげ、それによって人間に心の平穏（安心立命）を与えるものである。すなわち、私たちにとって最も根源的な癒しの概念と言える。

本研究は仏教の儀式から自己作品のインスピレーションを得たものの、仏教における散華について歴史的な検証を行うことが目的ではないことを予め述べておく。ここでは、仏教の散華の象徴がどのように造形化されているのかを考察し、それをもとに私なりに再解釈したジュエリーを制作することを目指し、ジュエリー制作の幅広い可能性を見出したいと思う。

（論文審査結果の要旨）

筆者はこれまで銀という伝統的な貴金属を主に使って、自身のジュエリーにおける表現を試みてきた。その造形は多肉植物などの自然界のモチーフから着想され、植物の持つ量感や曲線を銀に置き換えてきた。しかしながら、博士課程では銀とは根本的に加工方法、着色方法が異なるチタンによるジュエリーの制作を試みた。本論文では、そうした差異を乗り越える、あるいはその特性を活かして、新しい自己表現を生み出すまでの過程が述べられている。

論文は制作のきっかけから始められる。仏教儀式の「散華」の記憶を通して、自身の韓国人としてのバックグランドと同じ仏教国である日本への関心とが結びつき、自身の表現への関心が人に安らぎを与えるジュエリーであることを再認識する。また、歴史的なジュエリーの例を通じて、タリスマンとして着用者に精神的な影響を与えることが、ジュエリーの根源的な機能であったことを確認する。

実制作の過程は、きわめて論理的に進められる。まず、表現のためには、チタンの特性を知るために、陽極酸化による着色の膨大なサンプルを制作することから始められる。博士課程の期間中に10作品を制作するが、当初ははっきりとした色使いの作品（博士作品１～４）であったものが、このプロセスで得た着色に関する知見により、より自己の表現にふさわしい中間色を使った作品（博士作品５～１０）へと発展させる。コンテンポラリー・ジュエリーの分野においては、チタンを使用した先行例自体は少なくないが、電圧によって微妙に変わっていく中間的な色味を活かしている表現は独自性が高い。論文では陽極酸化の原理から、作業過程、色味のサンプル、失敗例などを挙げ、その原理と制作工程に関する理解度の高さを示している。

パーツの成形は曲面を作り出すための専用の雌型と定タガネを制作して用い、曲げ加工とセットのた

めのヤットコなど、作業過程に合わせた工具の制作している点は、彫金の伝統技術を十分に習得していることがうかがえる。また、ロウ付けできないチタンと銀のセッティングについても、チタンを銀で挟み込む独自性の高い手法を開発する。その過程で、市販のチューブ絞り機によって、板状のチタンをプリーツ状に加工するといった発想の自由さを見せる。

また、造形表現においても、イメージのドローイング、スケッチからはじまり、大変手のかかるスタディー・モデルをいくつも制作するなど、真摯な姿勢がうかがわれた。

自身の関心を掘り下げながら、きわめて論理的、かつ構築的な実験過程を経て、独自な手法と表現へと発展させてきた過程が豊富な挿図とともに明快に述べられており、博士課程として相応しい論文にまとめられていると指導教員一同が高く評価した。

（作品審査結果の要旨）

論文中に掲載され、博士展に展示された[作品１]から[作品１０]について審査が行われた。
まず、博士課程での作品制作における素材としてチタンを選び、その研究課程及び、研究成果について評価 があった。チタンの陽極酸化について深く調査し、試行錯誤を繰り返しながら制作研究を続けた。通常、陽極酸化という方法で作成された着色チタンは、彩度が高く鮮やかな色彩のものが多いが、本人の研究テーマから徐々に導き出された中間色の優しいトーンの色味は独自性が強く心に響くものとなった。

次に制作工程、技術的な扱いについても、積極的な取り組みがみられた。修士課程の頃から、癒しなどの精神的なテーマに沿って植物をモチーフに制作を展開してきた。その制作手法は、ひとつのパターン(形状)を数多く組み合わせることで全体の造形がなされることが基本となっている。そのパターンとなる形状のために、数々の道具が作られている。炭素鋼をスリ出し鏡面にまで磨かれた鏨状の雄型、それを大きなハンマーで打ち成形するための鉛床や真鍮製の雌型を地道な努力で工夫し作りあげた。折り曲げやカシメのために改造されたヤットコ等も同様である。そうして作られたチタンやシルバーのパーツをまとめあげてひとつひとつの造形要素とし、数多くまとめ上げる膨大な手数、工程と時間から本人の作品は生み出されたのである。

そして作品そのものに対する評価も高いものとなった。[作品１]から[作品４]は、それぞれに対しての評価はあるものの、修士課程からの多肉植物をモチーフとした作品の流れの延長にあり造形としてもこなし切れていない固さが感じられた。しかし、[作品５]からは、散華から導かれた造形が生まれてくる。ひとつひとつの造形要素となる形状(パターン)も華葩をイメージさせるような明快なものになり素直に本人の意図が感じられた。全体の造形も固さが無くなり、散華の由来である天空からたくさんの花びらが舞散る情景が思い浮かぶような的確な表現がなされている。[作品５]と[作品６]、[作品７]と[作品８]、[作品９]と[作品１０]、３組のネックレスとブローチが趣を変えながらそれぞれの散華の情景を感じさせ、高い完成度でまとめられている。

以上により、圧倒的な仕事量と造形力によって制作された作品は、作品審査結果として本学博士に相応しいものであると認められた。

（総合審査結果の要旨）

博士論文題目「仏教儀式・散華からみたジュエリーの造形研究」、研究作品題目は「花びら吹く」である。修士課程のテーマであった癒しを与える造形から、本研究では着用時の精神的作用、世界感の共有からその根源を探る事を目的としている。モチーフとして幼少期の記憶の中にある散華をテーマに展開し、提出作品を制作している。論文ではジュエリーに関しての持論を述べた後、仏教の経典に見られる散華の事項を引用し、また実際に体験した儀式の有様を詳しく記し、提出作品それぞれの制作意図、技法の説明で結としている。第1章から結論まで無理の無い組み立てで明示されており、作品に至る経緯が明瞭に読み取る事が出来る簡潔な論文となっている。特に経典からの引用は良く研究されており散華の事を理解する上での中枢となっている。

提出作品では修了制作から続けているチタンによる造形に挑んでいる。チタンはアルミニウムと同等の比重であるが強度は６倍で耐食性にも優れ酸化皮膜でさまざまな色が得られるという利点がある。しかし加工においては強度があるぶん鋼のように固く、大気中ではロウ付けが不可能という欠点もある。そのため順調に制作を進めるには仕上げの手順と組み立て方等を念頭において作業工程を考える必要があり、何を準備したら良いかが一番苦労した点だと思う。まず各パーツを成形する治具作りから、陽極酸化したパーツを本体に取り付ける最終行程までが良く考慮されていた。陽極酸化での色彩表現も桐野先生のご指導により施行錯誤を繰り返しながらも満足いく結果を出している。提出作品は10点あるが内4点は散華序章にあたる作品であり、作業上の苦労も察せられるが、この4点により他6点が見事散華をテーマとした作品として表現出来たと思う。

崔君は韓国出身であるが、代々家の宗教が仏教であり幼少時より釜山の街に蓮の花の灯り、ローソクが灯される風景を見ていた事からこの作品に繋がり、良い結果が得られたと思う。今回の研究では論文、作品共充分な成果があり大いに評価する。